

「対話すること」と「自ら学ぶこと」

校長 森 和 久



新型コロナウイルス感染症への対応を行って行く中で、私たちの生活様式が大きく変わるとともに、教育の在り方も大きく変わってきました。それは、この状況だから

やむを得ず始まったことではありますが、「本来どうあるべきか」ということを考えさせられる機会でもありました。例えば、毎日会社に全員が集まって仕事をすることの意義については、それぞれの仕事の特性に応じて、その考え方がかなり変わってきたところもあるようです。

教育において、よく言われることとしては、「対話すること」と「自ら学ぶこと」の意義が改めて認識されたということがあると思います。

休校期間中はもちろん休日など、家で過ごすことが多くなり、人と会うこと、話すことが極端に少なくなる中、学校において人と会い、対話することは、学校の意義として再確認されました。子どもにとって、人と対話することは、多様な考え方を知る、コミュニケーション能力を身に付ける、人間関係を調整する力や社会性を身に付けるなど、成長に欠かせないものです。単に知識を得るだけではない学校の機能として、感染症対策を行いながらではありますが、これからも学校ならではの、直接対面して対話するということを学習の中で大切にしていきたいと考えます。

一方、直接対面しなくても、「対話」は随分できるのだということも明らかになってきました。本年度、相山女学園大学は原則オンラインで授業を行っています。私も全ての授業をオンラインで行っていますが、アプリを用いた同時双方型の授業でも、工夫と準備次第で、教室で行っていたこととほぼ同様の対話型の授業ができるということが分かりました。80人を超え

る講義の授業でも「グループで話し合っ全体場で発表する」「二人組になってロールプレイをする」「元のグループと組み合わせを変えたグループで話し合い（ジグソー法）」「ポスターセッション」など様々な形態での対話的な学びを、全てオンラインの同時双方向で行えるのです。学生（1年生）からは、「大学に入っても人と話すことができず、友達もつれない中、本当に貴重な時間だった」と好評でした。またゼミでは、大学に集まるスケジュール調整の困難さが全くなく、個別指導、グループ指導がスムーズにできました。オンラインでの対話活動は、思っていた以上にできずし、有効です。今後このような形態の学習はどんどん広がっていくと考えられます。小学校においても、そのための条件整備、リテラシーやモラルの育成に努めていきたいと考えます。

次に「自ら学ぶこと」ですが、これは前回の通信に書かせていただいたことと重なりますが、自分の時間が増え、自分で学ぶ必要性に直面したときに、多くの子どもが、何を、どういう計画で学んだらよいのかを、自分で考えられないということに直面したということです。これまでの学校教育の在り方として、自分で学習をコントロールする機会をもっと増やすべきであったということが反省されます。自分でどんな学習をするのかを考える、計画を立てる、進捗状況をふり返って必要な修正をするというようなことを、それぞれの学年の段階に応じて行っていく必要があります。このことは、一人一人に最も合った学習を行う「個別最適化」という考え方にもつながっていきます。そして、こうした計画を立てて自分に最も合った学習をすることを補助するツールとしても一人1台のタブレットは有効ですので、本校においても効果的な活用について研究していきたいと考えております。

